

NY発「女性2000年会議」・DVシェルター視察



北京以来五年ぶりに、ニューヨークで「女性二〇〇〇年会議」が開かれるというので、日本女性会議岡山連絡会の方たち四名と思いい切つて参加してきました。

会議のメインテーマは、「二十一世紀に向けた男女平等・開発および平和」。百八十八カ国の政府代表のほか、非政府組織(NGO)メンバーなど約一万人が

参加し、六月五日ニューヨーク国連本部で開会されました。国連ビルの外でのイベントでは、国連事務総長も顔を見せ、名刺交換や記念撮影の交流の輪に、様々な民族衣装が華を添えました。世界中から結集した女性パワーの迫力に、身を引き締められる思いがしました。

今回は、前回採択された「北京行動綱領」を巡り発展的合意が難航し、後退するのではという懸念もあったのですが、十日に女性への暴力に法的措置を取ることを各国政府に求める「成果文書」で最終合意し、閉幕しました。

今回もうひとつの目的として、DV(ドメスティック・バイオレンス)に取り組むニューヨーク市のシェルターを視察訪問してきました。

アメリカでは、家庭内暴力事件が交通事故、強盗などを合計した数より多く、深刻な社会問題となっています。被害を受けるのは女性だけではなく、子供たちも被害者で、直接暴力を受けたり、母親を守るため自らも殺人を犯す子供が少なくないという話にはショックを受けました。

今回私が訪問したのは、主に貧困家庭の女性たちの救済を対象にしている事務所で、局長のミズ・ジョデス・カーにお話を伺いました。ジョデスさんの事務所には年間七千人くらいの相談があり、二箇所あるシェルターの約百三十のベッドはいつもいっぱいだそうです。長い人で一年以上滞在する場合もあり、シェルターを出て、ドクターや歌手になって立派に自立した人も

いる一方、生活苦から元のさやに戻ってしまう女性も多いそうです。

これらの女性が経済的にも精神的にも自立できるように、また加害者の男性に対しても教育プログラムは欠かせないということでした。

住所は秘密ということで、シェルターに案内してもらいました。ちょうどボランティアの人たちと一緒に五歳以下の子供たちが食事中で、この間母親たちは仕事を捜すか働いているとの事でした。

ニューヨークのシェルターはすべて民間経営ですが、市と州からの補助が九二%あり、残り八%が寄付で賄われているそうです。

シェルターには、食料、家具、衣料など多くの寄付物資が備蓄されており、行政の援

助もさることながら、ボランティアの多さに驚かされました。また、子供たちへの保護が手厚いことにも感心させられました。顧みて、日本の現状には歯がゆい思いがします。

日本でも今後もっと表面化してくるであろうドメスティック・バイオレンス。被害者に対する安全で安心できる受け皿の必要性を強く再認識した訪米となりました。

【若井たつこ】
一九五二年、大阪生まれ。帝塚山学院大学卒業後、大阪府立病院救急医局秘書、

代議士秘書を経て、一九九五年(平成七)年、岡山市議会議員に初当選。福祉・医療・環境問題に取り組み、女性の地位向上、社会参加に全力投入。



DVシェルターのスタッフと若井議員